

本種は 2012 年現在、絶滅危惧種 I 類に選定され、どこに行けば出会えるのか、筆者にはまったく見当のつかない希少種であった。ところが、2012 年 7 月 15 日、そのような珍しいクロシジミに約 50 年ぶりに出会え、しかも♂♀ともに映像記録を撮ることができた。

名前はクロシジミとそっけないが、新鮮個体では太陽光線のあたる角度によって微妙に紫色を帯びるきれいなチョウで、実は、初めての出会いを比叡山で果たしている。残念ながら標本は母校の高知市青柳中学校に寄贈して長い年月が経つので、おそらく保管管理はできていないことだろう。しかし、初の出会いに関するデータはしっかり残っている。筆者が初めてチョウの図鑑を



入手したのは 1957 年 1 月 2 日。当時の正月買い初めの日で、薄給の教師であった父に懇願して横山光夫著、江崎悌三校閲「原色日本蝶類図鑑」（1954、保育社、定価 800 円）を高知市内の大丸で買ってもらったのだが、そのクロシジミの項に、Aug. 28, 1966、比叡山 1♀、Aug. 23, 1970 奥摩耶山頂という手書き記録があるのだ。記憶では六甲山奥摩耶が鮮明で紫を帯びる♂個体だったことまで思い出せるが、比叡山でみた記憶は消えてしまっている。

ちなみに、横山図鑑には「恐るべき敵虫と思われる蟻と仲良く相和し、助け合って共棲する蝶のいることは、自然界の奇蹟に近い習性といえる」との記述がある。すでにクロオオアリとの共棲は知られているが、詳細な生活史は当時未解明である。

その後、明らかとなった生活史については、白水隆著「日本産蝶類標準図鑑」（2006、学研）に詳しく記述されている。上記、撮影記録が撮れたのは、加古川の里山・ギフチョウ・ネットのメンバーとハチ北高原でウスイロヒョウモンモドキを観察したあと、T さんがいまどき貴重なクロシジミ観察地へと案内して下さったおかげで、感謝の気持ちでいっぱい。

この日、チョウを見た場所近くの路面には複数のクロオオアリが歩きまわっており、さらに進んだ奥の発生地では、写真のようなすぐには飛び立てない個体が路面近くでじっとしており、羽化したばかりなのか羽化不全なのかを最後まで確認することが出来ていないが、アリと共棲するゴマシジミ、オオゴマシジミ、キマダラルリツバメ、ムモンアカシジミなど、いずれの場合も蛹から羽化脱出して羽を伸ばすまでが最も危ないときで、この段階でアリに攻撃される可能性が高いといわれる。そのような生活史を知ったあとでは、これらのチョウが野外で飛び交う姿はあまりにも愛おしく、ネットで捕まえて標本にしようなどとはとても考えられない。チョウマニアが希少種ばかりを狙って乱獲するさまを「鬼捕り」と呼ぶようだが、確かに正常な人間にできることではない。



2013 年の訪問時には青空を背景とする記録もとれ、2017 年には交尾個体も観察できたが、2018 年には貴重な生息地が養鶏場設営のために雑木林が幅広く開墾されて、二度にわたる確認訪問でも本種の発生が確認できず、絶滅したのかもしれないと悲しい。

